

# 神奈川県歴史教育者協議会 横浜支部例会 第13回

2019年12月6日(金)

18:30~21:00

神奈川県民センター 703 会議室

会HP <https://kana-reki.jimdo.com/>

【多事争論】日頃の授業や関心事を参加者皆様お持ちください

【授業実践報告】

上田誠二

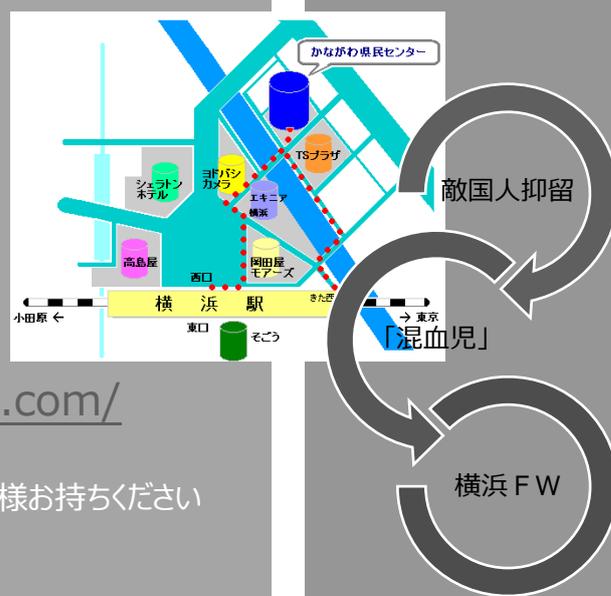
「神奈川・横浜と「混血児」」(仮)

今回は、「横浜／神奈川から世界を考える」第2弾として、『「混血児」の戦後史』の著者である上田誠二さんをお呼びし、地域と「混血児」教育について報告を頂きます。占領政策の拠点となった戦後の横浜では「混血児」問題が社会問題化しました。学校教育はこれにどう対応したのかを見ることで、今日の「多文化共生政策」や「インクルーシブ教育」についてともに考える機会したいと思います。



【連続テーマ】

横浜から世界を考える



論説 ■ 特報

連載 | 追う | 地域発 | 語る | 問う

戦後の占領期以降、日本人と外国人の間に生まれた子どもたちは、どんな生き方を強いられたのか。教育史家の上田誠二さん(48)は、昨年9月に『混血児』の戦後史(青弓社)を出版、自身が専門とする教育史の側面から焦点を当てた。

「純血」の日本人よりも劣等とみなされ、『不道徳の烙印』を押し付けられた彼女らは、生存否定とも言うべき差別を受けた。上田さんはどう指摘する。

排除の動きが鮮明になってきたのは、連合国軍による上置きの時代だ。進駐軍の米兵らとの恋愛、赤貧、性的暴行などによって生まれた子どもも多くが社会から除外された。

進駐軍兵士と関係を持った女性は「敵兵に体を許した女」として「パンパン」ときけすまれ、生まれた子もまた肌や髪、目の色の違いから「クロンボー」「アメリカ」などと後ろ指をさされ、駅や路上に置き去りにされ、生死の境をさまよう幼子も珍しくなかった。ページをめくるとここに立ち上っているのは、国家間の争いに翻弄され、日本人と外国人の「はさま」で生きざるを得なかった子の姿だ。上田さんは「大國への憧れや旧敵国への憎しみが交ぜられ、敗戦の劣等感を『混血児』とその母に押し付ける差別が横行した」と言う。

本書は、教育に関する国の記録や、関係者の聞き取り、新聞記事

時代の正体 日本人考



「混血児」に可憐な抑圧と差別の歴史をどう学ぶ必要があるか話す上田誠二さん 横濱市

かみた・せいじ 横濱高等専門学校専任講師。首都大学東京オープンユニバーシティ講師。専攻は現代史、教育史、音楽史。著書に『音楽はいかに現代社会をデザインしたか—教育と音楽の大衆社会史』(新曜社、主に同書の研究史上の意義が評価されて日本教育史学会の第28回石川謙賞を受賞)など(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)

はざまに生まれた「混血児」

といった資料を基に、こうした実態を描き出していく。

■「不道徳」な生

文部省(現文部科学省)が1950年代に刊行した『混血児指導記録』からは、黒人系の「混血児」が強い嫌悪にさらされていた事例を挙げる。例えば、ある黒人系の子どもが入学した公立小学校の記録にはこうある。

保護者である養父母が、子どもが黒人系だと分かると美母の元に帰そうとする。29年のベテラン教師ですら、入学当初は乱暴で成績も芳しくなかった当該児童を「恵まれない素質」とみなすこと

また、20代の若手教師らは「最近黒色が増してきた」「肌の色が違うばかりに一生解決できない悩みで苦しむであろうと思う」と、まらなくかわいそうだと記す。17歳、そして自己を否定される子ども、その状況を赤裸々にする。

一方、そもそも生を受けられなかった「混血児」も少なくなかった。上田さんはみている。その背景にあったとするのが、48年制定の旧優生保護法だ。旧法は「不良な子孫の出生防止」を掲げ、障害者や遺伝性疾患の患者、ハンセン病患者らの不妊手術や人工妊娠中絶を認め、人の命に優劣をつけた。

「人々が経済復興を謳歌する陰で『新しい國家の正々メンバー』となるべき人間か否かという、ふるい分けが法によってなされた。混血児もまた、戦後民主主義社会からごぼれ落ちる存在だった(上田さん)」

進駐軍兵士らとの子を身ごもった母親の中には、自発的に中絶を選ぶ女性もいた。貧困だけが理由ではない。旧優生保護法の背景に存在する、ある属性をもつて人の優劣を測る優生思想が導いたと、本書は喝破している。

かつて「混血児」を差別、排除してきたように、今も「優生的なもの」を選び取る考えが残り、社会的弱者の生きつらさに直結してはいないか。その懸念に、上田さんが筆を執った理由がある。

■今なお続く排除

「優生保護法が廃止になった現在も、この国に貢献できるか否かを問う意識が人々の胸の底に潜んでいる。そして続ける。」

「例えば、新生児診断で(胎児に染色体異常があると分かると)9割が中絶を望む現状は、障害者が生きていく現実を表すと同時に、『命の選別』の問題を生じさせている。また労働現場では非正規という不安定な雇用状況が恒常化し、学校現場では深刻なじめじめとそれを苦にした自殺が絶えない。上田さんの目には日本社会が一個人の尊厳を脅かす抑圧と差別を克服できていない」と喚ぶ。

克服するための手掛かりもまた、「混血児」の苦難の歴史の中にあるという。本書が多くのページを割いて取り上げるのは、救済に並生を捧げ「混血児の母」として知られる沢田美喜(1901~80年)だ。

二愛財閥の創業者若狭弥太郎の孫である沢田は、47年のある出来事きっかけに人生が大きく変わる。移動中の電車で風呂敷に包まれた黒い肌の「混血児」の遺体

に心を痛め、翌年、後に児童養護施設となる乳母院「エリザベス・サンダース・ホーム」を大磯町

に設立し、30年の間におよそ千人を社会に送り出した。

沢田が「混血児」に特化した私立学校を開いた経緯についても本書は詳しい。

沢田の回想として、地元公立小学校にホームの子どもの入学を打診したが、PTAに拒否された揚げ句、「混血児」を別棟で学ばせる考えを示されたというエピソードを紹介。沢田は「其志」を断念し、53年に就学年齢に達したホームの子どもの受け皿として聖マテオ学園小学校を、59年には同中学校を開校した。

「公立学校とは異なり、沢田は『混血』としてのアイデンティティを尊重した。自分たちのルーツにふたをする必要はないという教育を推し進めた」と上田さんは言う。

70年代以降、同学園には「混血児」以外の子ども入学するようになったが、「いずれも日本社会の隅に追いやられた存在だった」と上田さんが共通している点という。創立当初からの子ども排除しない教育に重きを置いた学園は今も、障害児や多様なバックグラウンドを持つ子どもたちが共に学ぶ「インクルーシブ教育」を実践している。

「混血児」を巡る歴史は現代社会が抱える問題と地続きであり、われわれは決して無関係ではないと強調する上田さんは、次のように言葉を紡いだ。

『「はさま」を生きた彼ら彼女らに救いの道を示した学園の教育から学ぶべきことは多い。戦後以降、この国に深く埋め込まれた優生思想が生み出す排除の意識を克服する鍵となる』

『混血児』の戦後史は、社会から「ごぼれ落ちる存在がいる現実を、私たちに強く訴え掛けている」(服部 エレン)

上田誠二さん：1971年、栃木県生まれ。横浜国立大学ほか非常勤講師、首都大学東京オープンユニバーシティ講師。専攻は現代史、教育史、音楽史。著書に『音楽はいかに現代社会をデザインしたか—教育と音楽の大衆社会史』(新曜社、主に同書の研究史上の意義が評価されて日本教育史学会の第28回石川謙賞を受賞)など(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)